

古典語「おぼゆ」の意味

- 現代語「覚える」との置き換えを中心に -

柳 椿 姫*

(e-mail : yuch33@naver.com)

<目 次>

1. はじめに
2. 従来の研究
3. 「覚える」で置き換えられる場合
3.1 「思われる」の場合
- 3.2 「記憶する」の場合
4. 「覚える」で置き換えられない場合
5. まとめ

キーワード：おぼゆ(oboyu), 覚える(oberoeru), 意味変化(meaning conversion), 意味拡大(meaning expansion), 基本的意味(fundamental meaning), 自発性(spontaneity)

1. はじめに

平安時代の仮名文学作品を読んでいくと、動詞「おぼゆ」がややおおく目につく。その「おぼゆ」の意味をとろうとすると、さまざまな言い方が考えられる。例えば、現代語の「覚える」や「思われる」のような言い方ばかりではなく、「似ている」や「記憶する」というようなかたちで解したくなる場合がある。これは、「おぼゆ」の意味が多用であることを指している。従来の研究においても、「おぼゆ」には「思う」「感じる」「習得する」「似る」「語る」「人から思われる」など多様な意味があるが、現代語にある「記憶する」の意味はまだない、というようにとらえている。さて、従来の研究では、主に辞典的な意味を列挙しており、こうした意味が作品のなかでどのような状況で現れるかなどについては説明していない。つまり、古典語「おぼゆ」が作品のなかでどのような場面や状況で現れるか、また、その意味を現代語で考えたとき、どのような言い方で置き換えられるか、その範囲などについて言及したのはほとんどない。

* 仁荷大 仁荷大学 古朝鮮研究所 研究教授

古典語「おぼゆ」における意味は現代語で考えて、一番近いことばとしては、「覚える」があげられる。1)それに、現代語「覚える」は「おもほゆ→おぼほゆ→おぼゆ→おぼえる」の語源を持ち、2)「思われる」「感じられる」「記憶する」などの意味で使われている。ここから「覚える」は「おぼゆ」の以前形態ととらえることができ、古典語「おぼゆ」は、「思われる」「感じられる」「記憶する」「似る」などの意味をもつとも考えられる。ところが、古典語「おぼゆ」の「似る」意味のように、現代語「覚える」で置き換えられない場合もある。この点に焦点をおくと、古典語「おぼゆ」は現代語「覚える」で置き換えられる場合と、置き換えられない場合があると考えられる。そこで、小論では、これらの点に着目して、平安時代の作品の中で『源氏物語』の用例を対象とし、3)現代語で考えて、古典語「おぼゆ」の意味を、大きく二つに分けて考察してみる。そこから、これらの意味が現れる状況を指摘し、かつ、「おぼゆ」の語義⁴⁾も導いてみることにする。

2. 従来の研究

古典語「おぼゆ」の意味に関する従来の研究について簡単にまとめてみると、5)まず、慶野(1936)は、6)「おぼゆ」を脳裏をかすめる鋭敏な感覚をいったものととらえて、その意味に対しては、くわしく次のように説明している。

「おぼゆ」には「思ふ」「感じる」「習得する」「似る」「語る」など、多様な意味があるけれど、「記憶する」意味だけはない。従って、「記憶する」に解されて来た部分の辞書や注釈書の訳語はすべて誤りであり、「思ひおこせる」「思ひ出せる」「思ひ浮かぶ」「念頭に浮かぶ」「眼前に髣髴し得る」などと改むべきものである。今

- 1) 現代語「覚える」について、辞典類では、『例外学習国語辞典』には①記憶する、②学んだことを身につける、③気が付く、『日本語源大辞典』には①自然に思われる、感じられる、②心にとどめる、記憶する、『角川国語辞典』には①記憶する、②身につける、③経験して習慣になる、④感じる、などの意味で叙述している。
- 2) 『日本語源大辞典』、『日本国語大辞典』、『広辞苑』、『広辞林』、『明鏡国語辞典』など。
- 3) 平安時代の仮名文学作品の中で、「おぼゆ」の用例は、『源氏物語』に一番多く出現している。柳(2005)pp.108-109に詳しい。また、対象としたテキストは秋山虔・阿部秋生・今井源衛校注・訳『日本全集、源氏物語』を使用し、用例の収集は直接調査による。
- 4) ここでの「語義」とは、「根本の意味」ともいう。「一つの語が文脈を離れてもさし得る内容」である。
- 5) 柳(2005)pp.98-103から抜萃、再引用。
- 6) 慶野正次(1936)「「おぼゆ」といふ語の再検討」『国語解釈』11、瑞穂書店、pp.101-103。

更めいたことのやうではあるが、精確なる注釈は、単なる辞書の知識のみによつて絶対に不可能である、ということ、この機会に、更めて強調しておきたい。(p.101.)

とのべて、古典語「おぼゆ」の口語訳の意味にはさまざまなものがあり、また、口語訳をすることにおける辞典的意味のみによることは不可能であると指摘している。しかし、結局、「おぼゆ」の辞典的な意味を列挙していることに終わり、「おぼゆ」が現れる一つ一つの場面や状況については省略している。

次に、石川(1956)は、7)「おぼゆ」の成立とその意味に関して言及しているが、その意味に対して次のように述べている。

平安朝の「おぼゆ」には、(イ)「感じる」という場合であるが、他に、(ロ)似通ふ、(ハ)ふつと頭に浮かぶ、(ニ)想ひ出す、(ホ)人から思はれる、の意味があり、(ハ)、(ニ)、(ホ)は誤解されやすい事を述べた。殊に、「記憶」と訳してよいやうな場合は、「おぼえ」と名詞化した場合にはないでもないが、動詞の場合は、嘗て記憶した事を想ひ出す意味はあつても、新しくこれからおぼえるといふやうな現代の用法に当たる例は皆無であると思ふ。(p.47.)

と、慶野氏と同様に「記憶する」の意味がないことと、多様な辞典的な意味を列挙していることにとどまっている。

さらに、石川氏と慶野氏が、おぼざっぱに意味を分類しているところに着目しているとすれば、藤川(1973)は、8)「似る」「おぼゆ」「似通う」の三つのとこばの使い分けを比較する中で、「おぼゆ」が「似る」に解される場合について触れている。例えば、

- (a) …ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとおぼえたり。(明石、p.247:3.)
- (b) 口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし。
(宿木、p.372:12.)

の「おぼゆ」は、

7) 石川徹(1956)「平安時代語彙考証(その三)」『平安文学研究』19-12、pp.42-46.

8) 藤川照三(1973)「「似る」「通ふ」「おぼゆ」一字治十帖を中心にして」『国文学解釈』5、48-6、pp.86-87.

「おぼゆ」が「自然に思われる」から「似ている」までの距離はきわめて近いものである。一 中略一 性格・態度を主として感じにつれて「おぼえ」といっていると、とれないでもないが、一般的な「けはひ」「有様」について「おぼゆ」といっているのだとみるのが、穏当であろう。それと同時に、その「おぼゆ」は、自然に思い浮かんでくるような状態であるから、主体の願望によってはてしなく流動し、変化しながら、美化の方向へ流されてしまうものであろう。(pp.86~87.)

と、「おぼゆ」の「似る」意味が現れる点について集中して説明している。このように古典語「おぼゆ」の意味には文中で現代語でさまざまなことばで解したくなる言葉である。

最後に、森田(1993)が、9)現代語「覚える」を説明するところで、古典語「おぼゆ」と関連させて述べているところがある。

古代語「おもほゆ」(思はゆ)に由来する語。「ゆ」は古代の自発の助動詞であるから、「思われる」に相当する。当人の意志とは関係なしに、おのずとそうに感じられ思われてくるのである。「覚える」は、もとは無意志的な感受作用であったが、それが無意識及び暗記の行為にも使われるようになった。(p.259.)

と、現代語「覚える」は、感受作用の「覚える」には、身体感覚や感情を心に催す現象であり(「感じられる」)、記憶作用の「覚える」には、無意志的なこと(「思われる」)と意志的なこと(「記憶する」)があると詳しく説明している。ここで、現代語「覚える」が古典語「おぼゆ」から引き続いてきたことは、森田氏が指摘したとおりであるが、古典語「おぼゆ」の性格が現代語「覚える」にどのぐらい残されているかについては推測できない。

以上の従来に研究を踏まえてみると、すくなくとも古典語「おぼゆ」の意味は、現代語で考えて、「覚える」で置き換えられる場合(「思われる」「感じられる」「記憶する」など)と置き換えられない場合(「似る」)があると指摘できる。また、これらについて検討していくうちに森田氏の現代語「覚える」に古典語「おぼゆ」の性格がどのぐらい残されているかに対する疑問のこたえも導くことができると思われる。

9) 森田良行(1992)『基礎日本語辞典』角川書店、pp.259-261.

3. 「覚える」で置き換えられる場合

一般的に古典語「おぼゆ」は、現代語「思われる」「感じられる」と解される場合が多い。例えば、

- 1) …いたくつなびきて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きてはかなくなりばべりにしかば、
戯れにくなむおぼえはべりし。(箒木、p.152:9)
- 2) …例の、うらもなきものから、いとも思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて、
虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし。(箒木、p.158:14.)

このように、1)2)の「おぼゆ」に対して、1)における『全集』には「気がする」、『評釈』には「考える」となっており、2)における『全集』10)には「感じる」と、『評釈』11)には「思われる」となっている。また、

- 3) …と思ひたまへり気色のあはれなりし中にも、雪降りたりし、暁に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしきはけしかりに…(幻、p.510:1.)

このように、「感じられる」の言い方が欲しいところであるが、『評釈』と『全集』には、「思われる」と解されている。このような「気がする」「感じられる」「気持である」「考える」などの言い方は、「覚える」で言い換えられる。ここでは、これらを一括して「思われる」の場合とする。ということから、「覚える」でカバーできる場合は、「思われる」と「記憶する」の言い方があると言える。では、「覚える」で言い換えられる場合は、どのような状況に現れるかを場面を中心にみていくことにする。

3.1 「思われる」の場合

- 4) 「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。」(若紫、p.308:7.)
- 5) その言ふかひなき御心のありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ、

10) 秋山虔編(1982)『日本古典文学全集、源氏物語』小学館

11) 玉上琢彌(1974)『源氏物語評釈』角川書店

心ながら思ひ知られける。(若紫、p.316:6)

- 6) げに、あさましう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。(濤標、p.293:1)
- 7) かの明石にも、かかる御事伝え聞きて、さる聖心地にもいとうれしくおぼえければ、..
(若菜上、p.104:5.)
- 8) 「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうおぼゆれば、いかにもいかにも、さやうのありさまはものうくなん」と..(早蕨、p.356:13)
- 9) 「かの人、先つころ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしくおぼえてこそ、訪れ寄らね。」(東屋、p.79:1.)

4)の場合は、源氏が不思議な夢を見、占者に合せている場面である。源氏は、占者の「その中には～はべる」という解釈を聞いていると、その内容がやっかいなことと思われて「自分の夢ではない」と言い訳している部分である。5)の場合は、北山の尼君がなくなった後、源氏は帰京している若紫を訪れた。そのとき、少納言と対話している場面である。まま子である若紫を悩んでいる少納言の話に対して、「そのたわいのない様子をかわいく懐かしく思われなさることも格別な宿縁であろう」と話しているところである。6)は、源氏と明石の君がそれぞれ住吉詣をする場面である。明石の君には遠く源氏の様子がはるかに見えるが、自身の自分を考えると会えない立場である。そのことが、かえて残念に思われるという心境を描写している部分である。7)は、明石の女御が男の子を産んだ。その消息が、明石の入道のところに伝えられ、入道のうれしい心情を描写している場面である。8)は夕霧が、匂宮を娘である六の君の婿君にしようとしたが、匂宮は、夕霧の気持を無視して二条院に中の君を迎えた。そこで、今度は同族であるが、薫の気持ちに当たってみる。しかし、薫の方も大君のことがあって、「～、いと心憂く、身もゆゆしく思われますので」と心境を表している場面である。9)は、薫が弁の尼に浮舟への仲介を頼んでいる場面で、自身の「うひうひしくおぼえて」とよそよそしくて馴れていない気持ちであることを弁の尼に話している部分である。

以上、4)～9)は、登場人物の気持ちや心情や心境を表している場面である。「おぼゆ」は、登場人物が、<占者の話><少納言の話><はあるかに見える源氏の様子><明石の女御の出産の頼り><夕霧の話><浮舟のこと>を聞いたり、見たりすることから、ひとりで<やっかいな><若紫に対するかわいく懐かしさ><残念な気持ち><うれしさ><不吉さ><よそよそしさ>のような気持ちや心情になることを表す場面の中に用いられ

ている。さらに、文中での現れ方が、主に感情を表す形容詞によって修飾されている「～くおぼゆ」形をしている場合である¹²⁾。

また、

- 10) 少納言は、おぼえずをかしき世を見るかな、これも故尼上の、この御ことを思して、御行ひにも祈りきこえたまひし、仏の御するしにや、とおぼゆ。(紅葉賀、p.392:4.)
- 11) 道遠くおぼゆ。(夕顔、p.252:3.)
- 12) 「年経たまへらむ、春秋の暮しがたさなども、誰にかは愁へたまはむと、うらもなくおぼゆるも、かつはあやしうなむ。」など聞こえたためへば...(蓬生、p.341:7.)
- 13) 御声へはひなどあてにをかしう、さま容貌思ひやられて、あはれにおぼゆる人の御ありさまなり。(紅葉、p.39:1.)
- 14) 藪しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。(早蕨、p.335:3.)
- 15) 「この二十日あまりのほどは、かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを、忍びて渡させたまひてんや、と聞こえさせばや、となん思ひはべりつる」(宿木、p.387:8.)

の場合である。10)は、北山の尼君が亡くなった後、源氏は、若紫の後見人になり、若紫を二条院へ移らせた。その後も源氏が若紫を可愛がっていることを見て、少納言が「おぼえずをかしき世を見るかな、～仏の御するしにやと思われる」と心境を表している場面である。11)は、夕顔が亡くなった後、その死体がある東山の寺へ行く途中の場面である。今せめて亡骸でも見ないと、いつの世になったらあの容貌を見る事ができるだろうという心の状態のうえ、気のせいしている。このような心の状態でひとりで「道が遠く思われる」という心情になることを描写している。12)は、須磨から京へ帰った源氏が、翌春、花散里の訪問の道の途中末摘花の邸のそばを通りかかる。そのとき、末摘花のことを思い出して、みずから廢屋へ訪れる。そこで、末摘花と源氏が対面する場面である。源氏が「お起こしになっ

12) 「おぼゆ」が使われている場面には、4)~9)以外に、さまざまな感情を表す形容詞が多く用いられている。例えば、「さうざうしく」「あさましく」「らうたく」「めでたく」「悲しく」「好ましう」「ねたく」「いまいましう」「苦しう」「恥かしう」「恐ろしう」「なつかしう」「ゆかしう」「いたはしう」「恨めしう」「惜しく」「うつくしく」「いぶかしう」「わびしく」など、喜び、悲しみ、恐ろしさ等々感情を表している形容詞が利用されている。また、小論の調査によると、「～くおぼゆ」のかたちで現れる形容詞のうち、感情を表す形容詞は、75種類があり、文意によって感情を表す形容詞は、18種類がある。また、動詞は、19種類があり、「胸につぶれて」「胸たがりて」などの言い方が多い。

た春秋の暮しがたきなども、だれに訴えになれるだろうかと疑ったりするような心もなく思われるのも、一方では、不思議なものである」という心境を表明している部分である。13)は、大納言(柏木の弟)が二番目の北の方として真木柱を得た。真木柱は、螢兵部卿宮との間に生まれた宮の御方を連れてきて、一緒に大納言の邸に住んでいる。大納言は、自身が自分の子だけに関心を寄せていることから宮の御方が気の毒に思われた。そこで、関心を寄せるつもりで、宮の御方のところへ行って話しかけている部分である。大納言の話しに答えている宮の御方の様子がいとしく思われる容貌をした人のように想像されるという大納言の心情を描写している。14)は、中の君は、大君がなくなった悲しみのうちに春を迎え、宇治の山中にも春日の光がさしてくることを見る。それを見ていると、ひとりでに過ごしてきた月日が夢のように思われるという中の君の心境を描写している。15)は、薫が中の君を訪れ、お互いに胸中を訴えあっている。そのとき、中の君は、宇治のところへ連れて行ってほしいと薫に話している。「この二十日すぎたころは、あの近くの寺の鐘の音も聞きたいと思われませんが、..」と中の君の心情を表している場面である。

以上、10)~15)の「おぼゆ」は、登場人物が、ある状況におけるおのずと浮かんでくる、あるいは、ひとりでにそういう状態になる気持ち・心境・心情を表す場面の中に使われている。さらに、文中での現れ方は、文の内容によって感情を表す形容詞、形容動詞、動詞が修飾する[~く、て、におぼゆ]形をしているか、感情(心情)・心境を表す内容を受ける[sentence+(と) おぼゆ]形をしている。

4)~15)の「おぼゆ」は、主に登場人物の心情や気持ちを表す表現に用いられており、文中での現れ方が[~く、て、におぼゆ]形と[sentence(一つの文の形態)+(と) おぼゆ]形をしている場合である。

さて、

16) 普賢菩薩の乗物とおぼゆ。(末摘花、p.366:9.)

17) 春の殿の御前、とり分きて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、行ける仏の御国とおぼゆ。(初音、p.137:10.)

のような場合がある。16)は、登場人物が末摘花を見て「普賢菩薩の乗物のように思われる」ということを描写している場面である。17)は、六条院の春の殿の御前(紫の上の庭)は、特別で、梅の香も御簾の中の薫物のかおりと取り違えるほど、風に吹き匂う状況がこの世の極楽浄土のように思われるという状態を描写した場面である。16)17)は、登場人物

が、末摘花の鼻の様子、六条院の紫の上の春の庭の状況に対して、自分が持っている知識である。「普賢菩薩の乗物」「生ける仏の御国」と混同¹³⁾を起こした場合である。すなわち、紫の上の庭の状況を見て、それが極楽浄土と思ったということで、実際には、極楽浄土(生ける仏の御国)ではないことをわかっていながら、そのように表現したことで、修辭的な仮構が見えるところでもある。つまり、4)~15)の「おぼゆ」は、登場人物が、ある状況に対する心情や気持ちを表現することにおいて心情語や心的態度を表す内容で示しているとすれば、16)17)は、自分の知識で示していることで、表現方法が異なっている。すなわち、表現主体(考え手や話し手)の表現方法が違っていることである。

これまで、4)~17)の「おぼゆ」は、登場人物がその場で自然に浮かんでくる心情や気持ちなどを表す表現の中に使われている。「おぼゆ」は、「現在～がひとりで思い浮かぶ」と自発的なことばとして働いている。したがって、「おぼゆ」の意味が「思われる」である場合は、主に登場人物の感情(心情)や気持ち・心境を表すところに焦点が置かれているときであると考えられる。かつ、文中の現れ方が、[～く、て、におぼゆ]形か[sentence +(と) おぼゆ] [(名詞)+(と)おぼゆ]形をしている場合である。

3.2. 「記憶する」の場合

- 18) 母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「おとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばや、とおぼえたまふ。(桐壺、p.120:1)
- 19) 「小侍従と弁と放ちて、また、知るはべらじ。…さらに、これは、この世の事にもはべらじ」と、泣く泣くこまかに、生まれたまひけるほどのことも、よくおぼえつつ聞こゆ。(橋姫、p.153:8.)
- 20) 「あやしかりしほどにみな忘れたるにやあらむ、ありけんさまなどもさらにおぼえはべらず。」(手習、p.287:12.)
- 21) 「あこが亡せにしいもと顔はおぼゆや。」(夢浮橋、p.370:6.)

18)は、登場人物である源氏が、亡くなった母に似ている藤壺の宮を慕う場面である。源

13) 「混同」とは、ある対象に接して、それがほんとうはAなのに、Bとあまり似ているので、すっかりBだと思ひ込んでしまう、という体勢を装った場合をいう。国立国語研究所報告57、pp.141-143による。

氏は、母が自分を産んですぐ亡くなったので、母の姿について全く知らない、その容貌さえ思い浮かばないということを描写している。19)は、薫が八の宮のところに行ったとき、弁(女三の宮の小侍従の娘)に会って、自分の出生に関する秘密を聞く場面である。弁が、その当時の二人(柏木と女三の宮)の文通の話の内容、また、薫が生まれ頃の内容をよく思い浮かべながら申し上げることを描写している。20)は、宇治では、浮船が亡くなったと騒ぎをしていたが、実は、気を失い僧侶と尼たちの助けで、小野の里で意識を回復している。小野の妹尼が、浮舟にこれまでの事情を聞いているが、浮舟は、「不思議なほどみな忘れてしまったのでしょうか。あったことなどもいっことも思い浮かばないのです。」と答えている場面である。21)は、浮舟が小野にいる。薫は、憎都から浮舟に似ているような人の便りを聞いて、小君を内密に使者として浮舟がいる小野に派遣しようとする場面である。隠密に小君を呼んで「亡くなった姉の顔は覚えているか」と尋ねている。

18)~21)の「おぼゆ」は、主に登場人物の過去の出来事や人が思い浮かんでくるかどうかを描写する場面の中に用いられている。その上、「記憶している」の言い方で置き換えられるところであろう。しかし、19)の場合における弁は、昔の女の三の宮と柏木のことを記憶しており、そのことが自然に想起されて、薫に話していることである。このときの「おぼゆ」は、「思い浮かぶ」の言い方が適切であり、「記憶している」の言い方で置き換えることはできない。すなわち、登場人物が、過去の人や出来事を記憶しているというはたらきと関連していることであり、「おぼゆ」の意味として「記憶している」を指すことはできない。『源氏物語』以外には、次のような場合もある。

22) 昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる憎の、黄なる地の袈裟着たるが来て、...(『更級日記』 p.302:12、『全集』)

23) 「しかしか、いと興あることなり。いで覚えためへ。時々さるべきことのさしいらへ、繁樹もうち覚えはべらむかし」といひて、...(『大鏡』 p.38:15、『全集』)

22)の場合は、作者が『源氏物語』を求めて読んだ後、その読みが耽読していたのでその内容が自然に記憶されてしまって、それでも思い浮かばれるということに「おぼえ浮ぶ」が使われている。23)の場合は、雲林院の菩提講の講師を待つ間に、大宅世継と繁樹という人が、昔語りに登場するところである。この場面は、大宅世継が「昔物語をしてここにいる人に昔のことをよくわかるようにしましょう」と言ったことに対して、繁樹があいづちをし「そ

うそう、とても面白いことである。さあ、昔のことを思い出して話してください」というところである。

22)23)の場合における「おぼゆ」においても「記憶して思い出す」「記憶して話す」と解したくなる場所である。しかし、18)～21)のように、登場人物が記憶しているというはたらきと関連している場合であり、意味として「記憶している」をいうことではない。

つまり、18)～23)の「おぼゆ」は、登場人物が、過去の出来事や人を記憶しているこそ、昔の出来事や人が想起されることを表す場面の中に用いられている¹⁴⁾。また、作品の展開中では、登場人物がある人物にこれまで隠されていた新しい出来事や事実を知らせる場面に使われている傾向もある。したがって、「記憶する」で解したくなる場合は、主に登場人物と過去の出来事や人が結び付くところに焦点が置かれている場合であると言える。さらに、この場合は、文中での現れ方が、[～はおぼゆ][～も～おぼゆ]のかたちで現れる傾向はあるが、一定なかたちを持たない。

では、古典語「おぼゆ」が現代語の「記憶する」で置き換えられないとすれば、古典語の動詞の中で「記憶する」の言い方に置き換えられるものには、どのようなことばがあるか。

a) 「思ひならふ」

24) 君より思ひならひぬ世の中の人¹⁴⁾はこれをや恋といふらむ。

(『伊勢物語』38、p.165.)

24)は、和歌の中に見られる「思ひならふ」の場合で、男が紀有常のところへいったところ有常が不在だったので帰宅し、後で帰ってきた有常に送った歌である。「君からならおぼえました、世の中の人¹⁴⁾はこれを恋というでしょう」と「思ひならふ」は、「習い覚える」または「思い知る」で置き換えられる。

『源氏物語』の中では、二つの用例が見える。

25) 柏木「人より先なりけるえけおめにや、とり分きて思ひならひたるを、今になほかなしくし

14) 古典語で、過去のことが思い出される、思い浮かぶの意味で使われていることばには、「おぼゆ」以外に「思ひ出づ」も多く用いられている。「思ひ出づ」は、何々思い出すと主体の意志が働いている場合と意志のない場合がある。

たまひて、しばしも見えぬをば若しきものにしたまへば、心地のかく限りにおぼゆるをりしも見えたてまでらざらむ、罪深くいふせかるべし。」(若菜、p.273:8.)

- 26) 匂宮「かごとがましげなるもわづらはしや。まことは、心やすくてしばしはあらむと思ふ世を、思ひ外にもあるかな」などは、たまへど、また二つとなくて、さるべきものに思ひならひたるただ人の仲こそ、かやうなる事の恨めしさなども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し。(宿木、p.400:8.)

25)の場合は、柏木が長男に生まれたという違いがあるためであるか、親から特別に思われることが習慣になっていること、26)の方は、外に愛する人などがなくて、それが当然なことと思うことが習慣になっているということである。25)26)の「思ひならふ」は、ずっとそのように思っていることを示している。

b) 「思ひおく」

- 27) 院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思ひおきければ、..(漂標、p.308:9.)

- 28) 荒れはつる朽木のもとをやどり木を思ひおきけるほど悲しき。(宿木、p.450:15.)

27)は、朱雀院にも齋宮が伊勢に下るになった時(大極殿の莊厳だった儀式)に、不吉なほど美しいと拝見したかたちを忘れがたくお考えになっておきました...と「お考えになって起きました」は、「記憶しています」の言い方に置き換えてもよいところであると思われる。28)の方は、和歌の中に見られる場合で、荒れはてた朽木のような尼の住まいを昔宿った所と覚えている...のように「思ひおきける」を現代語で「記憶している」の言い方で解してもよいところであろう。

また、

- 29) 馬頭「今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。」(帚木、p.141:10.)

- 30) 源氏「かうかうの事をなむ思うたまへわづらふに、母御息所いと重々しく心深きさまにものははべりしを、あぢきなすき心にまかせて、さるまじき名をも流し、うきものに思ひおか

れはべりにしをなん、世にいとほしく思ひたまふる。」(濤標、p.309:9.)

- 31) ……このごろは、時々御宿直とて参りなどしたまひつつ、かねてよりならばしきこえたまふをも、ただつらき方にのみぞ思ひおかれたまふべき。(宿木、p.376:6.)

29) は、女の品定めのところ、馬頭の発言の部分である。「ただひとえにまじめで、おちついた性格の女こそ一生の頼りところと考えておくべきなのだ」の「考えておく」とは、このような事実をこれから心に留めておくということである。30) は、「うきもの」とおぼえられて、31) は、「つらき方にばかり」おぼえていらっしゃるという状態を示し、「記憶している」「記憶しておく」の言い方が考えられるところである。

c) 「思ひとどむ」

「とどむ」という動詞は、ある状態が消えなくて後に残ることである。「とどむ」が複合動詞化した「思ひとどむ」の場合にも「記憶する」と関連がある。

- 32) 源氏「あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくて集へる方々の中に、かのをりの心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、..」(玉鬘、p.117:3)

- 33) 年ごろ、まめ事にもあだ事にも召しまつはし、参り馴れつるものを。人よりはこまやかに思しとどめたる御気色のあはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに心おかれたたまつりては、いかでかは目をも見あはせたまつらむ。(若菜下、p.248:10.)

32)の場合は、「記憶にとめる」ということを表し、33)は、「心にとめる」という状態の存続を表している。

以上、現代語の「記憶する」に置き換えられることばについて調べてみたが、積極的に「～を記憶する」おいう意味を持ったことばはない。ただ、「思いおく」が、現代語の「記憶する」の使い方に近く用いられる傾向があることだけ指摘できる。

古典語における現代語「記憶する」に置き換えられることばがない¹⁵⁾ことについては、まず、現代語「記憶する」が、主に数学の公式・九九・言葉・単語などの知識や人名・地名・手順・時間・場所などの事柄を覚える時に用いられているが、『源氏物語』の中では学習をする場面や事柄を覚える場面がなかったので、「記憶する」の意味を持つ語が見

15) 平安時代の作品である『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『落窪物語』『堤中納言物語』『宇治拾物語』『宇津保物語』を調べてみたが、現代語の「記憶する」の言い方に置き換えることばはなかった。

出されないのではないかと思われる。次は、「記憶する」は、時代が遅れて発生したことばである¹⁶⁾ためということも考えられる。以上のように、古典語の動詞における現代語「記憶する」に置き換えられることばはない。

これまで「おぼゆ」の意味における「覚える」で置き換えられる場合について調べてみた。「思われる」「記憶する」の意味が現れる傾向を見ると、「思われる」の場合は、主に登場人物の感情(心情)や気持ちを表すところに焦点がおいたときであり、「記憶する」の場合は、主に登場人物と過去の出来事や人が結び付くところに焦点を当てたときであると言える。また、「思われる」の方は、登場人物の記憶しているという働きと関係なしに自然に浮かんでくる気持ちや心情を表す場合であるが、「記憶する」の方は登場人物が記憶しているというはたらきと関連して、過去の人や出来事が自然に想起されることを表すときである。このとき、「思われる」と「記憶する」の中には、「思い浮かぶ」という意を内包している事が導いてくるのである。

一方、現代語の「思われる」には、例えば、

- ①ぼくにはそう思われないんですよ。
- ②この患者さんはりんごが食べたいように思われます。
- ③辛かったことも、思い出となれば楽しく思われる。
- ④日本の農家のように一道具一目的とまでは行っていないことが、ふしぎに思われた。

このように、①の場合は、私にはそのように判断できないということが含んでおり、②の場合も、私の考えでは、この患者さんは～と思われますという判断が、③④は、自分にはそのように認識されたということである。①②の場合は、「おぼゆ」の意味における存在していない使い方であり、③④は、「おぼゆ」にもみえる。すなわち、「おぼゆ」の意味として「思われる」は、主体の判断とは無関係であり、単に自然自発的なことである。そこで、「おぼゆ」の意味として「思われる」と現代語の「思われる」は、自発性を持つ範囲で同じの使い方をしている。これは、現代語「記憶する」においても「おぼゆ」の意味として適切ではないということともに、古典語「おぼゆ」のすべての意味・用法が、現代語の「覚える」に引き継がれてとは言いにくいことを指す。「覚える」に自発性が認められる範囲で「おぼゆ」の性格が保存されていることである。

16) 「記憶する」は、小論での調査によると、「記憶」というのが名詞として、式亭三馬(1813)の作品『浮世床二編上』になって、「土竜さんは記憶とやらい。」(浮世床二編上、p.132.『集成』)と、時代が遅れて最初に出現している。

4. 「覚える」で置き換えられない場合

「覚える」でカーバできない場合は、「おぼゆ」の意味が「似る」の言い方で置き換えられるときで、「似る」の意味がどのような状況で現れるかを見してみる。

- 34) 明石「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ」ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。(明石、p.247:3.)
- 35) 玉鬘「大臣は、ねびまさりたまふままに、故院にいとようこそおぼえたまつりたまへれ。」(竹河、p.63:11)
- 36) 君には腕を枕にて、灯をながめたるまみ、髪のコぼれかかりたる額つきいとあてやかになまめきて、対の御方にいとようおぼえたり。(浮舟、p.112:4.)

34)~36)の「おぼゆ」、すべてが[AがBにおぼゆ]形をしており、ほとんどの注釈書には、34)は、明石のほのかなるけはひが伊勢の御息所に、35)は、大臣(夕霧)が故院(源氏)に、36)は、君(浮舟)が対の御方(中の君)に似ていると訳されている。

また、

- 37) 玉鬘「脚立た沈みそめはべりにける後、何ごともあるかなきかになむ」と、ほのかに聞えたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえて若びたりける。(玉鬘、p.125:3.)
- 38) 源中納言、兵部卿宮、何ごとも昔の人に劣るまじういと契りことにものしたまふ人々にて、遊びの方はとり分きて心とどめたまへるを、手づかひすしなよびたる撥音などなん、大臣には及びたまはずと思ひたまふるを、この御琴の音こそ、いとよくおぼえたまへれ。(紅梅、p.40:6.)
- 39) 家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。(松風、p.397:9.)

37)38)の場合は、人の声、琴の音が似ている、39)の場合は、家の様が長い間住んでいた海辺の家に似ていることで、[A(声、音、物事)がB(声、音、物事)におぼゆ]の形をしている。

34)~39)のように[似る]の意味が現れる状況について見ると、例えば、35)と39)の場合における35)は、薫が、年賀のときに玉鬘の邸へ訪問した場面である。玉鬘、侍従、

薫が居合わせている場で、玉鬘が「大臣(夕霧)は、お年を過ごすにつれてとても故院のように思われる」と大臣のことを話している。玉鬘自身が見た時、お年を過ごすことにつれて、大臣(夕霧)は何となく故院に似ているような気がする、すなわち、大臣を見ていると自然に故院が連想される¹⁷⁾ということ、大臣(夕霧)と故院の関係が結び付くところに「おぼゆ」が使われている。39)の場合も、明石の君の一行が大堰の邸に移って家のさまを見てみると、それが長い間住んできた明石の海べの家のさまによく似ているように思われる(自然に浮んでくる)琴を描写、明石の海辺と大堰の邸のようすを結び付けるところに「おぼゆ」が利用されている。このように「おぼゆ」は、ある人物や物事とある人物や物事の関係が結び付くところに使われていると言える。殊に、物事の場合より人物と人物が結び付くところに集中している。

そこで、「おぼゆ」の意味における「似る」が現れる場合は、登場人物がある人や物事に出会い、それによく似ている人や物事が自然に浮んでくるという心情や気持ちを表す表現の中で、登場人物(物事)とある人物(物事)との関係が結び付くところに焦点がおいた場合であると考えられる。さらに、文中の現れ方は、[AはBにおぼゆ]の表現形式をしている。

ところで、「似る」の場合も「記憶する」と訳したく場合と共通しているところがある。すなわち、「似る」の意味で現れる場合においても、[AがBにおぼゆ]のBが、登場人物の記憶している過去の人物や物事であることから記憶しているというはたらきに関連しているという点である。これは、「記憶する」の場合は、登場人物が過去のことを記憶しているというはたらきに焦点が置かれているが、「似る」の場合は、記憶しているというはたらきの方より、あるものがそれによく似ているという実感に焦点が当てられるときであると思われる。

もう一つ、「おぼゆ」の「似る」意味が出てくることを関連して[AはBにおぼゆ]形の「おぼゆ」は、Aがあって、それによく似ているBが思い浮かぶことである。そこで、<似ている>と<思い浮かぶ>が一緒に存在する近接関係によって、似ているから自然に思い浮かぶことで、<似ている>は原因になり、<自然に思い浮かぶ>は、結果になる。このように考えると、二つの言葉は換喩の方法で意味変化をして、意味拡大されたとも説明である。これは、藤川氏が「「おぼゆ」が自然に思われている」から「似ている」まで距離はきわめて近いものである。」¹⁸⁾とあいまいに説明した「距離はきわめて近いもの」は、近

17) ここでの連想とは、ある対象に接したときに、すぐさま他の何らかを思い浮かべる、という形式によって、その両者がいかに類似しているかを感じとらせようとする場合をいう。国立国語研究所報告57、pp.141-143による。

接関係による意味変化を指すことであると考えてもよいであろう。

これまで、「おぼゆ」の意味における「似る」が現れる場合をみると、「似る」の意味は、登場人物や物事とある人物や物事の関係が結び付くところに焦点がおいたときである傾向がある。それは、物事より人である場合に集中している¹⁹⁾。

さて、[AはBにおぼゆ]の表現形式をし、「似る」の意味で現れる「おぼゆ」について、平安時代の仮名文学の作品である『土佐日記』『請蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『落窪物語』『堤中納言物語』『宇治拾遺物語』『宇津保物語』を調べて見た結果、『源氏物語』と『宇津保物語』のみ用いられていた。『宇津保物語』にも、

- 40) 額にかゝれるほど美しげなり。そびやかになまめかしきかたち内侍のかみの御やうだい、容貌におぼえたり。(桜上上、p.374.『大系』)
- 41) ~なかたに給て、おとど、おこなひ人めしいいでゝみ給ふに、御らんぜし人におぼえたり。(四、かすがまうで、p.274:3、『宇津保物語研究会』)

のように、わずか二例しか求められなかった。[AはBにおぼゆ]形は、『源氏物語』の中で集中して使われている。他の作品の中で、[AはBにおぼゆ]形が見当たらないのは、作者の文体との関連性、作品の性格、分量との問題などがかかっていると思われる。これに関する詳細なことは、今後の問題として取り上げる。

5. まとめ

これまで、現代語で考えて古典語「おぼゆ」の意味について、「覚える」で置き換えられる場合と置き換えられない場合があると想定して、「おぼゆ」の意味が現れる状況を調べてみた。結論から先に言うと、現代語の「覚える」が古典語「おぼゆ」をすべてカバーできないということと「おぼゆ」の意味が現れる状況をまとめてみると、概略三つの傾向があり、そこから「おぼゆ」の語義を導き出すことができた。

まず、「おぼゆ」の意味におけるさまざまな意味が現れる状況をみると、大きく「思われ

18) 藤川(1973) p.86による。

19) 柳(1996)「おぼゆ」考 - 『源氏物語を中心に』、『日本語と日本文学』22、pp.26-33.

る」は、主に登場人物の感情や気持ちを表すところに焦点をおいた場合であり、「記憶する」は、登場人物と過去の出来事が結び付くところに焦点が当てられた場合であり、「似る」は、登場人物や物事とある人物や物事の関係が結び付くところに焦点をおいた場合である傾向がある。しかし、これらは明確に境界線で区切られることを指していることではない。「おぼゆ」のほとんどが登場人物の気持ちや心情を表す表現に用いられているということ踏まえてその傾向性を指摘したことである。言い換えれば、「おぼゆ」は、表現主体(話し手や聞き手)の表現方法に着目してみると、以上のような三つの場合に分類されるということではない。これらの意味の中には、「現在～が自然に思い浮かぶ」という意が含まれており、そこから「おぼゆ」の語義である「思い浮かぶ」が導かれてくる。

「おぼゆ」の意味と基本的意味(語義)「思い浮かぶ」の関係は、意味論の観点から見ると、「おぼゆ」の基本的意味である「思い浮かぶ」から「思われる」「感じられる」「思い出してはなす」「似る」などの意味へ変化する意味変化の一種で説明できる。すなわち、「おぼゆ」のさまざまな意味は、基本的意味「思い浮かぶ」から派生したことである。たとえば、「思い浮かんで話す」の場合は、記憶しているからこそ思い浮かんで話すことで、思い浮かぶから(原因)話す(結果)ことである。「思い浮かぶ」と「話す」は、<思い浮かぶ作用>と<話す活動>が一緒に存在する関係であり、二つの言葉はその内容において近接している近接関係がもとになっている。このように原因から結果への換喩の方法で意味変化をして「思い浮かんで(思い出して)話す」になったのである。したがって、「おぼゆ」の多様な意味は、基本的意味「思い浮かぶ」から意味変化した結果、意味拡大されたことである。このような意味拡大は、「おぼゆ」の文中で現れ方や修辞やコンテキストの問題などがかかわってこそ成立することとなる。

次に、古典語「おぼゆ」と現代語「覚える」の関係で、古典語「おぼゆ」は、前で指摘したとおり、現代語で考えて「覚える」が、古典語「おぼゆ」の意味をすべてカバーすることができないということである。それは、現代語の「覚える」は、自発性のある場合とない場合にかかわらず用いられているが、「おぼゆ」の場合は、必ず自発性が要求されるためである。そこで、「覚える」は、「おぼゆ」の性格をある程度保ち続けていることは事実であるが、全く「覚える」と同様であるとは言にくい。

【参考文献】

- 石川徹(1956)「平安時代語彙考証(その三)」『平安文学研究』19-12、pp.42-46.
慶野正次(1936)「「おぼゆ」といふ語の再検討」『国語解釈』11、瑞穂書店、pp.101-103.
藤川照三(1973)「「似る」「通ふ」「おぼゆ」一字治十帖を中心にして一」、『国文学解釈』5、4
8-6、pp.86-87.
森田良行(1992)『基礎日本語辞典』、角川書店、pp.259-261.
吉田金彦(1978)『上代助動詞の史的研究』明治書店、pp.81-82.
池上嘉彦(1986)『意味論』大修館 pp.49-64、pp.113-124.
柴谷方良、影山太郎、田守育啓(1983)『言語の構造(意味、統語篇)』くろしお出版、pp.186-209.
柳椿姫(1996)「おぼゆ」考一「源氏物語を中心に」、『日本語と日本文学』22、pp.26-33.
_____ (2005)『類似を表す表現の言葉』不二文化、pp.108-109.

| |
|--|
| 논문 투고 일자 : 2016. 08. 31. 논문 심사 일자 : 2016. 11. 02. 게재 확정 일자 : 2016. 11. 03. |
|--|

 <要旨>

 古典語「おぼゆ」の意味
 — 現代語「覚える」との置き換えを中心に—

柳椿姫

現代語で考えて古典語「おぼゆ」の意味について、「覚える」で置き換えられる場合と置き換えられない場合があると想定して、「おぼゆ」の意味が現れる状況を調べてみた。結論から先に言うと、現代語の「覚える」が古典語「おぼゆ」をすべてカバーできないということと「おぼゆ」の意味が現れる状況をまとめてみると、概略三つの傾向があり、そこから「おぼゆ」の語義が導き出してきた。

「おぼゆ」の意味におけるそのような意味が現れる状況をみると、大きく「思われる」は、主に登場人物の感情や気持ちを表すところに焦点をおいた場合であり、「記憶する」は、登場人物と過去の出来事が結び付くところに焦点が当たった場合であり、「似る」は、登場人物や物事とある人物や物事の関係が結び付くところに焦点をおいた場合である傾向がある。これらは明確に境界線で区切られることを指していることではない。「おぼゆ」のほとんどが登場人物の気持ちや心情を表す表現に用いられているということを踏まえてその傾向性を指摘したことである。また、「おぼゆ」の意味と基本的意味(語義)「思い浮かぶ」の関係は、意味論の観点からみると、「おぼゆ」の基本的意味である「思い浮かぶ」から「思われる」「感じられる」「思い出してはなす」「似る」などの意味へ変化する意味変化の一種で説明できる。すなわち、「おぼゆ」のさまざまな意味は、基本的意味「思い浮かぶ」から派生したことであろう。

 The meaning of 「Oboyu」 in ancient language
 -Focused on its conversion to the modern language 「oboeru」-

Yu, Cuoun-Hee

This study attempts to examine the cases that the meaning of 「oboyu」 can be converted or not to 「oboeru」. The result of the study showed that the classical language 「oboyu」 can not be all covered by the modern language 「oboeru」. The context that the meaning of 「oboyu」 appeared has three tendencies and the meaning of the word, 「oboyu」, could be also identified. 「omowareru」 was mainly focused on expressing feelings or moods of characters. 「kiokusuru」 was largely employed in connecting the characters with past events. 「niru」 was mostly used in connecting the characters with things. These three tendencies could not be clearly divided. This study points out the tendencies based on the following that most 「oboyu」 was used to express the feelings and moods of characters. There is a difference that the modern language 「oboeru」 is used without spontaneity, while it is positively necessary in the classical language 「oboyu」.